

研究主題

熱く語りたくなる道徳科の授業と心耕す教育活動

～子どもたちが問いに迷って、言葉でぶつかって、思いがつながる ABC の道～



白井市立七次台小学校

内藤 美樹

星 美紀

目次

I 研究の全体構想と研究主題 1

II 研究主題について

1 研究主題設定の理由 2

2 仮説と設定の理由 2

III 研究の実践

1 仮説1における具体的手立て 4

2 仮説2における具体的手立て 12

3 仮説3における具体的手立て 13

IV 成果と課題

1 児童の変容 19

2 成果と課題 20

3 まとめ 21

I 研究の全体構想と研究主題

学校教育目標

たくさんの「できた」「わかった」「ありがとう」
～「できる喜び」「わかる楽しさ」を味わい、感謝を伝え合える学校を目指して～



学校研究目標

どの子にも「できた」「わかった」を味わわせる授業づくり
～ICT の効果的な活用を通して～



道徳科のめざす児童の姿

- すばらしい「いのち」の考え方をもとに、全ての生命を尊重しようとする子
- ・かけがえのない自分のよさに気づき、自己実現を目指す子
 - ・家族や自分の周りにいる人たちと支え合い助け合おうとする子
 - ・よりよい未来を築こうとする子

学校、児童の実態

本校では、学校教育目標である「できる喜び」「わかる楽しさ」を味わい、感謝の心を伝え合うことを大切にしながら、児童像として「進んで学ぶ子」「やさしく思いやりのある子」「マナーとルールを守る子」の育成を目指している。児童は概して素直で明るく、元気いっぱいに学校生活を送っている。日常的に自分から進んであいさつを交わし、歌声が学校に響くなど、活気ある雰囲気が見られる。また、「気づき清掃」を取り入れることで、児童が自ら考え、行動する力を養うとともに、学校環境の美化にも主体的に取り組んでいる。授業においては、めあてやゴールを明確にしながら、教え合いや振り返り活動を通して学びを深めている。ICT 活用にも積極的で、ICT 研究指定校としての特色を活かした授業改善が進んでいる。一方で、家庭環境の多様化により、日常的な生活面や人間関係において配慮や支援を要する児童も少なくない。学校生活では、自己の思いをうまく言語化して伝えることが難しい場面も見られ、友達同士のすれ違いやトラブルもある。また、学力面では児童間での二極化が顕著となっており、基礎的・基本的な力の定着に課題を抱える児童と、高い意欲で発展的に学ぶ児童との間に開きが見られる。



研究主題

熱く語りたくなる道徳科の授業と心耕す教育活動
～子どもたちが問いに迷って、言葉でぶつかって、思いがつながる ABC の道～

Ⅱ 研究主題について

1 研究主題設定の理由

目標や児童の実態から、道徳的価値について考え、語り、意見を交わすことで自己の生き方について考えを深める力を育てたいと考えた。

本研究で、熱く語りたくなる道徳科の授業とは、主発問を“熱く語りたくなる問い”にする授業形式とする。

また、「心耕す教育活動」とは、日々の活動を通して「環境づくり」や「考える力・語り合う力・つながる力」といった対話の基礎を養うことと考える。その結果、児童は安心して自分の考えを語り合うことができ、価値を深められると考えるからだ。

副題の「問いに迷って」とは、熱く語りたくなる問いによって、児童が「自分はどちらの立場なのか」「本当にそう思うのか」といった問いに立ち止まり、葛藤しながら自分の価値観と向き合って考えることを指す。「言葉でぶつかって」とは、児童が自分の思いや考えを言葉にして伝えようとしたり他者の意見を聴いたりしながら意見を交わし合う場面を表している。ただ発表するのではなく、「語りたい」と思えるような状況があることで、主体的な対話が生まれると考える。「思いがつながる」とは、他者の考えや気持ちにふれながら、自分との共通点や違いに気づき、心が動いたり、考えが深まったりする状態を指す。このようにして、価値の本質に迫りたい。

加えて、本研究では、道徳科の授業の発問構成を「ABCの道」としてAの道：Ambitious（自己の生き方についての考えを深める）、Bの道：Bridge（物事を多面的・多角的に考える）、Cの道：Connect（自己を見つめる）と定義した。授業づくりの際には、教材や児童の実態に応じてねらいに合った発問構成を設計する。いずれの道も道徳性の育成において大切な視点であり、優劣をつけるものではなく、相互に補完し合う関係として活用することが望ましいと考えている。本研究は特に、「問いに迷い」「言葉でぶつかり合い」「思いがつながる」プロセスを重視し、Aの道を中心とした授業づくりの可能性を提案するものである。

	イメージ	主なねらい	中心となる構成・問い
Aの道 Ambitious	生き方を問い、 志を育む	自己の生き方についての考えを 深める	価値に迫る“熱く語りたくなる問い” を中心とした構成
Bの道 Bridge	考えをつなぐ	物事を多面的・多角的に考える	複数の立場や視点からの情報整理を 活用した構成
Cの道 Connect	自己とつながる	自己を見つめる	自分自身の経験や感情と照らし合わせ て価値に向き合う構成

2 仮説と設定の理由

仮説1

主発問を“熱く語りたくなる問い”にすることで、児童は価値を自分ごととして捉え、自分の思いを熱く語り合い、自己の大切にしたい価値について考えを深めることができるだろう。

“熱く語りたくなる問い”とは、ディベート的な問いで、正解のない問いに児童自身が向き合うことで考え、考えたことを語りたくなり、自らの立場を明確にしながら他者と意見を交わし、対話を通じて価値に迫る本質的な問いである。従来のディベートのように、審判が客観的に勝敗を判定したりはしない。児童は自

分の考えで自由に立場を選ぶことができ、話し合いの途中で立場を変えることも認めている。また、肯定側・否定側の発言時間が等しく配分されるような形式的な制限も少なく、対話はより自然な流れの中で進められる。

さらに、「問題提示から主発問へ」と一気に踏み込み、いきなり本質的な対立構造に児童を立ち会わせることで、「私はどう思うのか」「なぜそう思うのか」といった思考の軸が明確になりやすくなり、本質に迫る話し合いに時間をかけることができると考える。

以上のことから、「ABCの道」におけるAの道である熱く語りたくなる問いによる話し合いで、児童は価値を自分ごととして捉え、自分の思いを熱く語り合い、自己の大切にしたい価値について考えを深めることができるだろう。

仮説2 「いろはの道」を意図して授業作りをすると、児童が熱く語り合うことができるだろう。

これまでの道徳科の授業において、教材の特性や主題に応じて多様な展開があり、「どう展開を組み立てるか」といった授業設計に悩む教師が多い実態があった。そこで、道徳科の授業構成を「いろはの道」として以下の3つに定義した。

	イメージ	教師のねらい
いの道（入口）	初め・出発点	取り組みやすい。
ろの道（路）	滑走路・助走	教科書の流れに沿いながら価値について考えさせる。
はの道（羽）	飛ぶ・飛翔	児童の実態に合わせ、価値について深く考えさせる。

道徳科の授業展開を「いろはの道」（入口・路・羽）に基づいて分類することで、多様な展開の型を明確に整理できるようになり、教師はねらいに応じて最適な授業設計ができるようになるだろう。これにより、授業準備が効率化されるとともに、価値へのアプローチが明確化し、児童が“熱く語り合う道徳科の授業”の成立を支える重要な要素となるだろう。

仮説3 日々の教育活動を通して心を耕し「環境づくり」や「考える力・語り合う力・つながる力」といった対話の基礎を養うことで、児童は安心して自分の考えを語り、価値を深めることができるだろう。

熱く語りたくなる道徳科の授業を実現するためには、「問いに迷い」「言葉でぶつかり」「思いがつながる」といった対話のプロセスを可能にする「土台づくり＝心の耕し」が欠かせない。児童が安心して自分の考えを語り、他者と深くかわかっていくためには、日々の活動を通して安心して語れる「環境づくり」や「考える力」「語り合う力」「つながる力」といった「心耕す教育活動」を積極的に取り入れる必要があるだろう。

加えて、ICTの活用も土台を支える有効な手立てであると考えている。意見の記録や共有、分類や比較といった活動をデジタル上で行うことで、児童の思考が可視化され、話し合いの場に参加しやすくなると考えられる。また、児童自身が自分の考えの変化や他者との違いに気づくきっかけにもなり、思考の深まりや内省の質の向上も期待される。

こうした日々の積み重ねによって、児童は道徳科の授業において安心して自分の考えを語り、価値を深めることができるだろう。

Ⅲ 研究の実践

1 仮説1における具体的手立て

授業実践 同じ教材で発問や授業構成を変えて4回行った。

(1) 主題名／内容項目名 「ペットの幸せ」 (D-19 生命の尊さ)
教材 「いぬとわたしの10の約束」(訳：落合恵子)／絵本・映画映像より

(2) 主題設定の理由
本学級では、生き物係を中心に動植物を大切にする児童が多く見られる一方で、責任を自覚していない児童もいる。特にペットのように命を預かる存在との関わりは、命を大切にする姿勢や他者視点での想像力を養う重要な機会となる。児童にとって身近な存在であるペットの幸せを題材に、「命を預かる責任」について、価値をぶつけ合うことで、自分の生き方に深く迫る契機とするため本主題を設定した。

(3) 本時のねらい
「ペットは幸せか？」という主張を通して、ペットと命の関わりについての意見を多面的に捉え直し、命を扱う責任と重さを自分の生き方に結びつけて考える。

(4) 本時の展開と実際の授業の様子

過程 時配	○学習活動と主たる発問 ・児童の反応	指導上の工夫・ICT 活用
導入 5分	1 価値に対する方向づけ 問 ペットを飼ったことがあるか。それはなぜか。 (ある) ・可愛いから。 ・好きだから。 ・癒しになるから。 ・捕まえたから。 (ない) ・世話ができないから。 ・親がだめと言うから。 ・お金がかかるから。	・Forms の事前アンケート結果を提示。 ・AI によるアンケート分析結果の提示。 ・飼う飼わないそれぞれの理由から、自分と生き物との関わり方を認識させる。 
展開 30分	2 ペットの幸せについて考える 学 「ペットは幸せか？」 ○ポジショニングで自分の立場を明確にする。	・飼っていない児童は学級で育てたチョウを想起させる。

	○理由をワークシートに書く。 ○はい、いいえ、間の3つの立場に分かれてグループで話し合う。 ○それぞれの意見を述べた後に質問や反論をする。 (はい) ・毎日お世話してもらえるから。 ・好きなものや餌をもらえるから。 ・可愛がられているから。 (いいえ) ・狭いところに閉じ込められて可哀想だから。 ・可愛がっているのは初めだけだから。 ・旅行とか置いていかれるから。 (間) ・可愛がっているけど、それが迷惑な時もあるかもしれないから。 ・両方の意見がわかるから。 3 視点を変えて話し合いを深める 絵本『いぬとわたしの10の約束』より内容紹介 ○10の約束でどれが一番心に残る？ ・“私より長生きしない”ってところ。命に終わりがあってこと、あまり考えたことなかった。 ・“ちゃんと話を聞いて”ってところ。犬にも気持ちがあるのだと感じた。	・ポジショニングマップで立場を可視化する。 ・子供達の意見を進める、広げる、深める、つなげる。 ・本人の発言が深く考えられるように意図して問い返して揺さぶる。 ・子供の発言を繰り返し、本人や他の児童に吟味させる。 ・教師なりの受け止め方をして本人や他の子に返す。 ・話し合いが始まったらタブレットは一度閉じる。 ・絵本の内容の抜粋動画を視聴させる。
振り返り 10分	4 価値の主体的自覚 ○ ペットの幸せは何で決まるだろうか。 ・飼い主 ・愛情 ・自分 ・人生 ○命について考えたことを振り返りに書こう。	・ポジショニングで考えの変化の軌跡を確認する。 ・オクリンクプラスに記入、共有する。 ・リアクションやコメントを送り合うことで他者理解を深める。 ・授業前にとったアンケートのテキストマイニングと比べ、学級の傾向の変化を見る。

(5) 授業の振り返り (○成果 ●課題)

① 1回目に行ったクラス

(4年生・昨年度担任クラス・熱く語りたくなる問いがある授業を日頃から行なってきた・昨年6月頃)

問 小学4年生でペットは飼うべきか？

学 ペットを飼うときに必要な覚悟は何だろう？

○活発な討論が見られた。

○「命との向き合い方を考えられた。」と振り返る児童がいた。

●ポジショニングで立場を明確にできたが、話し合い後の変化を読み取らなかったためICTによる深まりは感じなかった。

●初めの発問が主な構成だったので、主発問に話し合いをする方が子供たちも考える価値について深まると感じた。

→ICT 活用法の見直し

→授業構成の見直し



② 2回目に行ったクラス (3年生・今年度交換授業で関わっているクラス)

問 生き物の命を大切にできているか？

学 小学3年生でペットを飼わなければならない決まりを作るべきか？

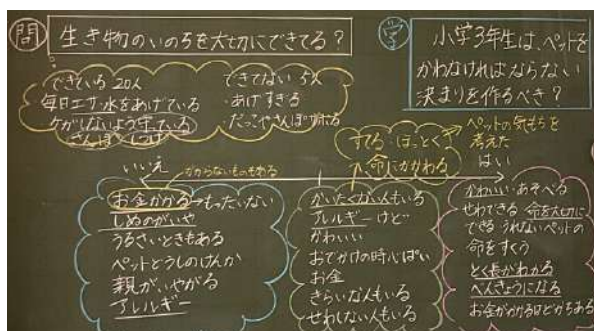
○ポジショニングを使うことで自分の立場を明確にできた。

○はじめは発言しない児童も、主発問に対する意見を積極的に言い始めた。

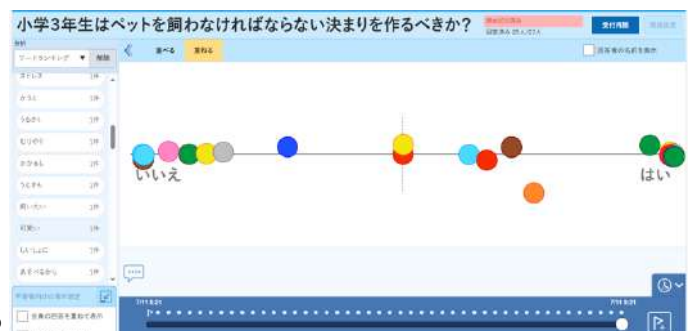
●アレルギーやお金問題に目が行きがちで、命の重さの価値に迫る内容まで至らなかった。

→発問の見直し

→問い返しの見直し



6



③3回目に行ったクラス（3年生・今年度交換授業で関わっているクラス）

問 ペットを飼ったことがあるか？それはなぜか？

④ ペットは幸せだろうか？ ※指導案と同じ発問

○ポジショニングを使うことで自分の立場を明確にできた。また、変化を視覚化できた。

○「幸せと思っていたが、話し合うことで本当かどうかわからなくなった」と深く考えたからこそ揺れたと考えられる児童がいた。

○「ペットを嫌な気持ちにさせたくない。」「心から大事と思う。」「1日1日を大事にしたい。」「もっとペットを大事にしたい。」「命が大切。」など、これからの自分の生き方について考える児童もいた。

●問題で時間がかかり、振り返りの時間が不十分と感じた。

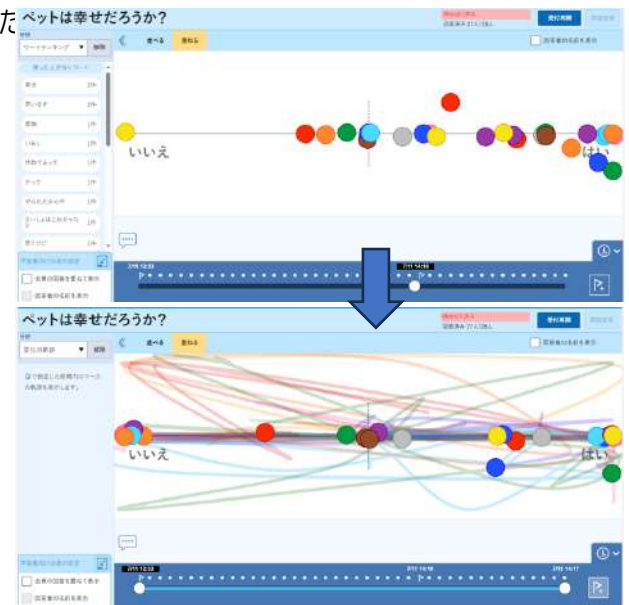
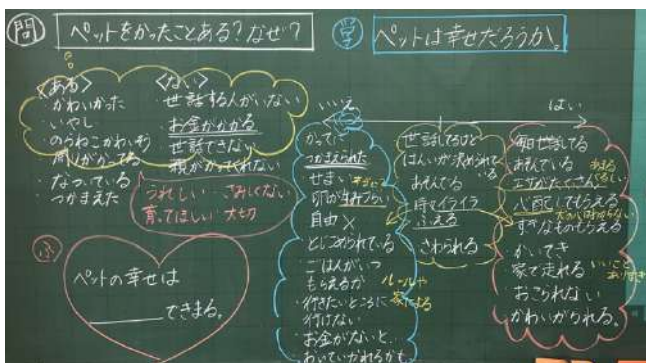
●時間が足りなくてICTを活用した振り返りが不十分だった。

●熱く語りたくなる問いのある授業にまだ慣れていなくて反論を言える児童が少なかった。しかし、反論した友達の話をよく聞くことで考えが変わる児童がいた

→導入の時間配分の見直し

→仮説2の指導の必要性

→話し合いによる変化への問い返しの見直し



④4回目に行ったクラス（担任クラス・熱く語りたくなる問いがある授業を日頃から行なっている・7月頃）

※指導案の構成

○「問題提示から主発問へ」と一気に踏み込む構成が、児童の集中力や思考意欲を高める効果があった。

○ポジショニングやタブレットでの意見の可視化（Forms やオクリンクプラス）を活用することで、自分の考えの変化に気づいたり、他者との違いを意識したりするきっかけが生まれた。

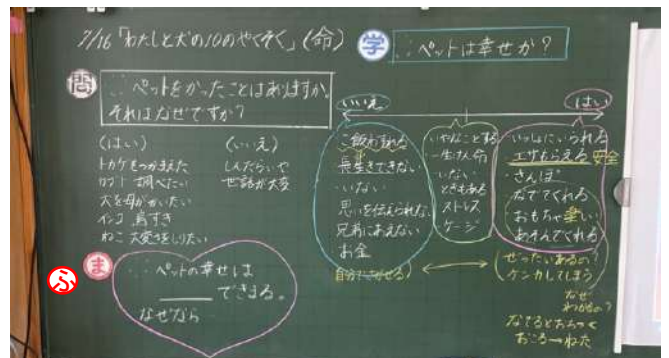
○ポジショニングでは話し合いで考えたからこそ、いいえに移動する児童が見られた。

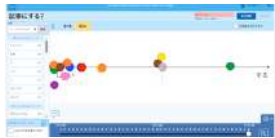
○テキストマイニングでは、授業前よりも授業後の方がより具体的により多様な回答が見られた。

○ICT を活用することで、授業前後でアンケートや振り返りを通じた思考の変容を把握でき、「考えの深まり」の可視化・分析が可能になった。

○自然な反論や意見のぶつかり合いが見られ、「話し合いの土台づくり」の重要性が明確になった。

●話し合い時の集まり方に改善の余地がある。



2	A	3年 あなた ならで きる	A 節度 節制	忘れ物をどうやら らなくせるだろ うか。	☆先生やお家の人に助けてもらうのは ありか？なし？ ○ 助けてもらうことへの葛藤を言葉 にできた。 ● 表面的な意見が多く、生き方への 結びつきが弱い。	
3	A	3年 新聞係	C 規則 の尊 重	☆めずらしく宿題を 忘れて怒られている 友達のことを記事に する？しない？	新聞係のマナーとは何だろうか。 ○ 記事化する責任と友達の気持ちの 揺れに向き合った。 ● 対話が広がりづらく、二者択一に なりがちだった。	
4	A	4年 ほっと けない よ	A 善悪 の判 断	友達に通して「言い づらい」と感じたこ とはありますか。	☆自分だったら声をかける？かけな い？ ○ 迷いに自分を重ねる姿が見られ た。 ● 自己決定としての深まりに個人差 があった。	
5	A	4年 だまっ ていれ ばわか らない	A 正直	☆悪いことをしたの に黙っていたことは ある？ない？	なぜ黙っていたらいけないのだろう か。 ○ 3者からの視点で討論することで 正直に生きることの意味を見つめる姿 が見られた。	
6	A	4年 絵葉書 と切手	B 友情	友達とはどんな人だ ろうか。	友達だからこそできることって何だろ うか。 ☆料金不足を伝えるか？伝えないか？ ○ 友達の条件について多面的に話し 合えた。 ● 「友達」の定義に個人差があり議 論がかみ合いにくい。	
7	A	4年 ブラッ ドレー の請求 書	C 家族 愛	自分から進んで家の お手伝いができるの はどんな時ですか。	☆親は子供に請求すべし？しないべ し？ ○ 請求の是非を迷いながら考える姿 が多く見られた。	
8	A	NHK for School こども のため の哲学	C 規則 の尊 重	みんなは学校のルー ルを守っているだろ うか？	☆ルールって本当に必要？必要ではな い？ ○ ルールの存在意義を本気で問う児 童がいた。 ● 問いが広がりすぎて焦点がぼやけ た。	

9	A	宿題 (オリジナル)	A 節度 節制	☆宿題を学校でやっていいか？だめか？	何のために宿題があるのだろうか。 ○ 宿題の意味をめぐって対立構造が成立した。 ● 現実的すぎて価値の深まりが限定的だった。	
10	A	ヒーロー (オリジナル)	A 個性 の伸 長	☆3人の中で最強のヒーローは誰だろうか？	ヒーローになるのに大切なものは何だろうか。 ○ 強さの意味を問い直す姿が見られた。 ● 架空性が強く、現実の自分との結びつきが薄い児童もいた。	
11	B	3年 ドッジ ボール 大会	C 公正 公平	どの人が当てはまるだろうか？	決めつけないためにはどうしたらいいだろうか。 ○男女それぞれの立場を全員が考えることで、多角的に考えられた。	
12	B	3年 ライラ ックの さく庭 で	C 国際 理解	国を超えて友達になれるだろうか。	どんな友達になれるだろうか。 ○ 異文化理解への視点が広がった。 ● 想像に頼りがちで多面的な深まりが不十分。	
13	B	4年 目覚ま し時計	A 節度 節制	みんなは決まりを守れているだろうか。	きまりを守れる「わたし」と守れない「わたし」の違いは何だろうか。 ○ 守りたいけど守れない自分がいることに目を向け、「守れる自分」と「守れない自分」の違いを比べた。	
14	B	4年 プロレ スごっ こ	C 公正 公平	いじめをなくすためにできることは何だろうか。	このクラスでなぜいじめが起きたのだろうか。 ○ いじめの背景を様々な視点から考えた。	
15	B	4年 雨のバ スとい りゅう 所で	C 規則 の尊 重	どの順番で乗ったらいいだろうか？	決まりは何のためにあるのだろうか。 ○立場の揺れを話し合いに表現できた児童が多い。	
16	C	4年 学校の じまん を大切 に	C より 良い 学校 生活	「わたし」が声をかけることができるようになったのはなぜだろうか。	どうやって七小自慢をつないでいったらいいだろうか。 ○ 自分の変化に気づき、自信をもつ児童がいた。 ○校長先生に学校自慢してもらうことでより愛校心を高めていた。	

17	C	3年 気持ちのいいあいさつ	B 礼儀	気持ちのいいあいさつとは何だろうか。	あいさつマスターになるためにはどうしたらいいだろうか。 ○ 自分の挨拶を見直す児童が見られた。 ● わかっていたことから新しい深まりがあまりなかった。	
18	C	3年 ぴっかぴか	C 勤労	なし	イヤイヤそうじと気づき清掃では成長にどんなちがいがあるだろうか。 ○ 清掃に向き合う視点の違いを比較できた。	
19	C	3年 花さき山	D 感動	どんなときに花が咲くだろうか。	美しい心って何だろうか？ ○ 日常の行動と心の在り方を結びつけて考えた。 ● 美しさの定義が抽象的で内省が浅くなった。	
20	C	4年 ここまで戻ってこれた	D 感動 畏敬 の念	努力することって何だろうか。	うまくいくかわからないのに、どうして努力ってするのだろうか。 ○ 努力の理由を多角的に考える児童がいた。 ● 議論の軸が定まらず、深まりに差が出た。	
21	C	4年 かっこいいせなか	C 公共 勤労	かっこいいとはどういうことだろうか。	内面がかっこいい人になるには何が必要だろうか。 ○ 見た目と内面のかっこよさを比較し合った。自分のなりたい具体像を想像できる児童がいた。	
22	C	4年 どう言えればいいかな	B 礼儀	親しき仲にも礼儀ありとはどういう意味だろうか。	友達に対する礼儀とは、どのようなものだろうか。 ○ 礼儀と関係性のバランスを考えられた。 ● 視点を切り替える力に差が出た。	
23	C	4年 ティーボールのできごと	A 個性 の伸 長	1組のいいところは？何だろうか。	自分のいいところを見つけるにはどうしたらいいだろうか。 ○ 自分のよさに目を向けようとする児童がいた。 ● 自己肯定感が低い児童は話し合いより、最後の褒め合う活動が響いた。	

24	C	4年 わかって くれてあ りがとう	B 相互理 解	伝えたいのに言えな かったことや聞いて もらえなかったこと はどんなことがある だろうか。	人とわかりあうためには何が大切だろ うか。 ○ 実体験を通して「わかり合う難し さ」を共有できた。 ● 話し合いに発展しにくく、対話が 途切れがちだった。	
25	C	大谷翔 平のグ ローブ (オリ ジナル)	A 努力 と強い 意志	大谷翔平さんを知っ ていますか？	人に届けたくなる思いって何だろう か。 ○ 「届けたい思い」が自分の生活と 重ねられた。 ● 他者との対話よりも独自の内省で 終わる児童が多かった。	

振り返り（○成果 ●課題）

○発問構成をA・B・Cに整理することで、ねらいが明確になり、構成や振り返りがしやすくなった。

○Aの道では、価値の揺れに向き合い、自分の立場や根拠をもって語る姿が育った。

○Bの道では、自分の経験と結びつけながらも、違う視点はないだろうか考える意識が高まった。

○Cの道では、安心して語り合える雰囲気の中で、共感的に聞き合う関係が築かれた。

●内容によってははっきり分けられず、分類が曖昧なところもあった。

2 仮説2における具体的手立て

	いの道（入口）	ろの道（路）	はの道（羽）
導入	・価値観について聞く ・言質を取ってあとで気づかせる ・友情レベルなどをナンバリング ・登場人物をクイズで確認 ・既習教材を改めて見直す	・同じ行動でも本質が違う例を使う ・授業のゴールを明確にする	・日常生活の写真 ・教材に出てくる実物や具体物 ・写真や新聞記事 ・絵本の活用 ・実演を取り入れる ・子供の日記やアンケート結果
資料 提示	各自黙読 ストックの活用	デジタル教科書 ちょこっとイラストを描く	・スライド ・写真 ・ペープサイト
ワー クシ ート	ノートに必要なことだけ書く	型のワークシート	オリジナルワークシート 思考ツール
発問	道徳的価値項目について問う	教科書	ディバートの発問
話し 合い	指名発表	班での話し合い	全員発表 つなげる
終末	・導入の価値をもう一度聞く ・何を考え始めたかという過程を見取り、意味づけする	・ノートに書かせ意図的に共有する ・図や色を使って表現する ・言語化、キーワードを入れて書く	・登場人物に重ねて共感度を図で表す、アドバイスする ・主人公になって自分へメッセ

	・価値観の変容を自覚する ・共有して意味づけし、児童同士で深め合う ・本時の学びが児童の背中を押すように励ます	(初めは、授業中は、今は、これから) ・変容や友達の素敵な考えを赤で記入する	ージを書く ・自己を直接振り返る (例：友達の良さとは?)
振り返り	一言日記	ワークシート	forms テキストマイニング オクリンクプラス
板書	・学びの対象を書く (考えることは何?内容は?) ・児童の発言をメモする	・主発問を書く ・場面絵に対応するように主人公の気持ちを書く ・横書き3等分+テレビ画面	・図式化 ・視覚化 ・黒板丸ごとレイアウト ・線の太さや色を変える ・図などで視覚的に訴える ・内容項目に合わせて板書を変える

振り返り (○成果 ●課題)

○「いろはの道」で分類することで、教師が授業設計を俯瞰的に捉えやすくなった。

○価値へのアプローチの段階に応じた指導方法が視覚化・整理され、教材・発問の選定がしやすくなった。

●道の使い分けが曖昧になることもあった。

●校内共有のための例示資料が不足していた。

3 仮説3における具体的手立て

(1) ガイダンス

「話すのって楽しい！考えるって楽しい！」を実感させるために授業の初回でガイダンスを行った。ウェブマッピングで道徳のイメージを膨らませ、ブレインストーミングでたくさんの意見を出す楽しさを実感させ、Qワード（NHK for school）を使って当たり前に思っていたことに目を向けて何故だろうと考える楽しさを実感させる。



考え、議論する道徳のはじめの一步！ 提案資料3
ブレインストーミング（脳が集合しアイデアの嵐を巻き起こす）のやり方



(2) 児童が安心して自分の考えを語ることができる環境づくり

	活動名	内容とねらい
1	レジリエンス	困難に出会っても立ち直る力（レジリエンス）について、事例やワークを通して考えることで、自己理解と自尊感情の向上を図る。
2	7つの習慣 (フランクリン・コヴィー)	『7つの習慣』を日常生活に結びつけ、自分の行動や選択に主体性をもたせる習慣を身につける。
3	親業 (トーマス・ゴードン)	親業を参考にした話し方・聞き方を学び、相手の気持ちに寄り添うコミュニケーション力を育てる。
4	ほめ言葉のシャワー (菊池道場)	1人の友達に対して、みんなで褒め言葉をたくさん伝える活動。語彙力とともに、他者を見る目・伝える力を高める。
5	会社 【写真】	学級内に会社のような役割を設定し、みんなのために何ができるかを考えて行動することで、自己有用感とクラスへの貢献意識を高める。
6	T字班での話し合い 【写真】	「教えて」「いいよ」など、互いに頼り頼られる小グループでの話し合いを通じて、関係づくりと助け合いの風土をつくる。
7	つぶやき 【写真】	友達の発表に対して、思ったことや反応を「つぶやき」として共有することで、対話が自然に続き、発表者の励みにもつながる。友達の発表に反応する文化を育て、対話の活性化や聞くこと・伝えることの喜びを感じられるようにする。
8	今日のきらり 【写真】	一日の中で友達の素敵な行動を紹介し合う活動。発表する側も、紹介される側も互いに嬉しさを実感できる場になる。友達の良さに気づき、発表し合うことで承認の気持ちが高まり、学級の温かい雰囲気づくりにつながる。
9	教室環境 【下記4】	道徳コーナーやふわふわ言葉・ちくちく言葉、真似したい行動の掲示など、日常の教室環境そのものが道徳的成長を支える場となるように工夫する。

写真

5 会社



6 T字班



7 つぶやき



8 今日のきらり



(3) 「考える力・語り合う力・つながる力」といった対話の基礎を養う活動

	活動名	内容とねらい
1	朝の会 「好きな○○」	日替わりで好きなテーマをみんなの前で発表。自己開示を通して、関係づくりと人前で話す練習を毎朝行っている。関係づくりと自己開示の場に加えて、みんなの前で堂々と話す力を育てる訓練として位置づけている。
2	究極の2択 【動画】	どちらが正しいとは言えない二択を提示し、理由や根拠を明確にして意見を伝え合う活動。討論の入り口として意見交換に慣れる目的もある。理由づけ・根拠づけをしっかりと行い、自分の意見に自信をもつ力や、対話・討論の土台を育てる。
3	どう解く？ (ポプラ社) 【動画】	問題に対して自分ならどう考えるかを発表し合う教材で、様々な問いに対する多様な考え方を学ぶことができる。多様な意見に触れ、自分なりの考えを説明する力をつけるとともに、他者の考え方を学ぶ機会とする。
4	掲示物の活用 【写真】	感情語や話し合いに使える言葉、表現の工夫例などを教室内に掲示し、思考や表現に迷ったときの支えとなるようにしている。さらに、教室には「道徳コーナー」を設け、「道徳ってどんな時間？」といった導入的なポスターや、前回の道徳授業の板書を写真で掲示するなど、道徳の学びを“見える化”する工夫も行っている。これらの掲示物は、「語りたい」「書きたい」と思える環境をつくり、子どもたちの言葉のストックや対話の質を高めるとともに、学びの継続性を生む役割を果たしている。
5	Qワード (NHK for School・ こどものための哲学) 【写真】	意見を深めるための「なぜ?」「どうして?」「どんな?」などの質問語(Qワード)を使い、友達の意見を広げる対話を促す。相手の意見をさらに深めたり広げたりする質問の仕方を身につけ、思考を深める対話力を養う。
6	思考ツールの活用 【写真】	比べる・分類する・関係づけるなど、思考の整理に役立つ図やフレーム(ベン図、Tチャート、Yチャートなど)を活用して、考えを構造的に捉えられるようにする。自分の考えを可視化することで、対話や発表の準備がしやすくなり、話し合いの質も高まる。視覚的に整理することで、考えを深めたり、他者と共有したりする力を育てる。
7	ハンドサイン 【写真】	話し合い時に、賛成・反対・質問などをサインで示すことで、授業の流れが組み立てやすくなり、子ども同士の指名もスムーズに行えるようにする。討論をしやすくする工夫として、発言の流れを視覚的にとらえやすくし、子ども同士のつながりを助ける。
8	一言日記 【写真】	「うれしい」「たのしい」などの気持ちを、より具体的な言葉で表現できるようにする語彙力育成活動。感情表現の幅を広げ、場面に応じた適切な語彙を選んで使う力を育てる。
9	感情語一覧の表	「うれしい」「かなしい」などの基本的な感情だけでなく、「そわそわ」「ほっとする」などの細やかな感情語を一覧表にまとめ、配付することで、児童が自身の感情を言語化する助けとする。気持ちをよりの確に伝える語彙力を育て、話し合いの中で表現する際の支援として活用している。自分や他者の気持ちに気づき、共感する力を育てることにもつながる。

10	熱く語りたくなる話し合い	道徳だけでなく、国語・社会・総合的な学習など他教科においても、正解のない問いに対して、賛成・反対や立場を分けて意見を出し合う「熱く語りたくなる話し合い」を取り入れている。立場をもって根拠をもとに自分の意見を伝え合うことで、思考の深まりや対話力の育成を図る。
----	--------------	--

資料

4 掲示物 と 5 Qワード



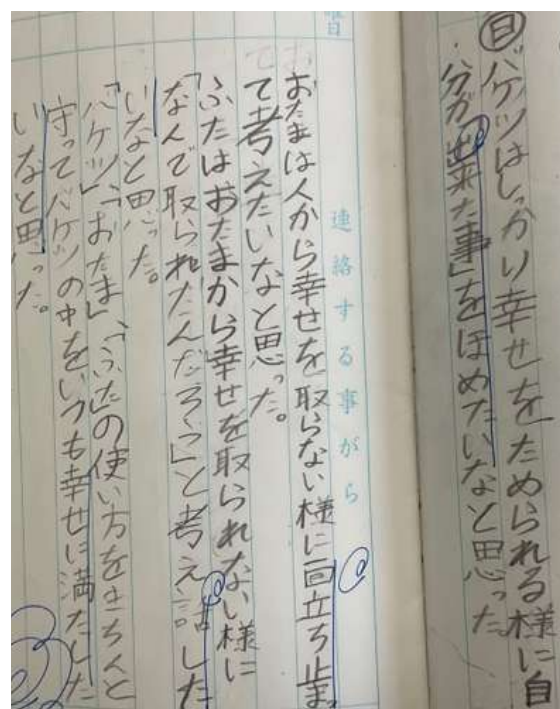
6 思考ツール



7 ハンドサイン



8 一言日記



(4)「考える力・語り合う力・つながる力」のためのICT活用による活動の支援
慣れるほど早くなる。日常的に活用する。

(タイピング大会・総合的な学習の時間でのパワーポイント活用・音読の録音提出・ドリルパークでの学習・オクリンクプラスで学級会・Canvaで掲示物作成など)

- Formsでの事前アンケートを活用して導入の共通土台をつくる
- スカイメニュー（発表ノートで並べ替えやお金の操作）



- スカイメニューのポジショニング機能を使い、自分の立場の揺れや他者の立場の可視化を行う。(P7 参照)
- Canva ホワイトボード機能でまとめと振り返りを視覚的に共有。リアクション機能により他者理解と共感を深める。



- デジタル教科書
朗読機能を使うことで、児童が教材に出会った時の反応を注意して見ることができる。
場面絵や思考ツール素材や心情メーターが含まれているので授業準備の負担軽減になる。



- ・オクリンクプラスや forms のテキストマイニング

授業の振り返りや学級会など意見を集計して傾向を見たり、意見を一眼でわかるようにすることで、話し合いの補佐的役割を果たしている。



- ・パワーポイント

他教科における議論においても、パワーポイントで説明したり、Word でメモをしったりしている。



(実践後アンケートより)

上記、表現力・思考力を鍛える活動と、安心して表現できる環境づくりの中から、「安心して自分の考えを語り、対話を深める話し合い」ができるようになった理由を児童に選択してもらった。最も多く挙げられたのは「熱く語りたくなる問いのある授業」であった。その他にも、「今日のきりり」「朝の会の好きな○○」「究極の2択」「思考ツール」など、ほぼすべての活動が複数名に選ばれていた。一方で「親業」は選択者がいなかった。これは教師が児童に意図的に接する問いかけ法であるため、選択されなかったことから、児童が一つ一つの活動意図を理解して取り組んでいたことがうかがえる。このことから、児童の選択は、話し合いができるようになった理由として十分に説得力があると感じられた。

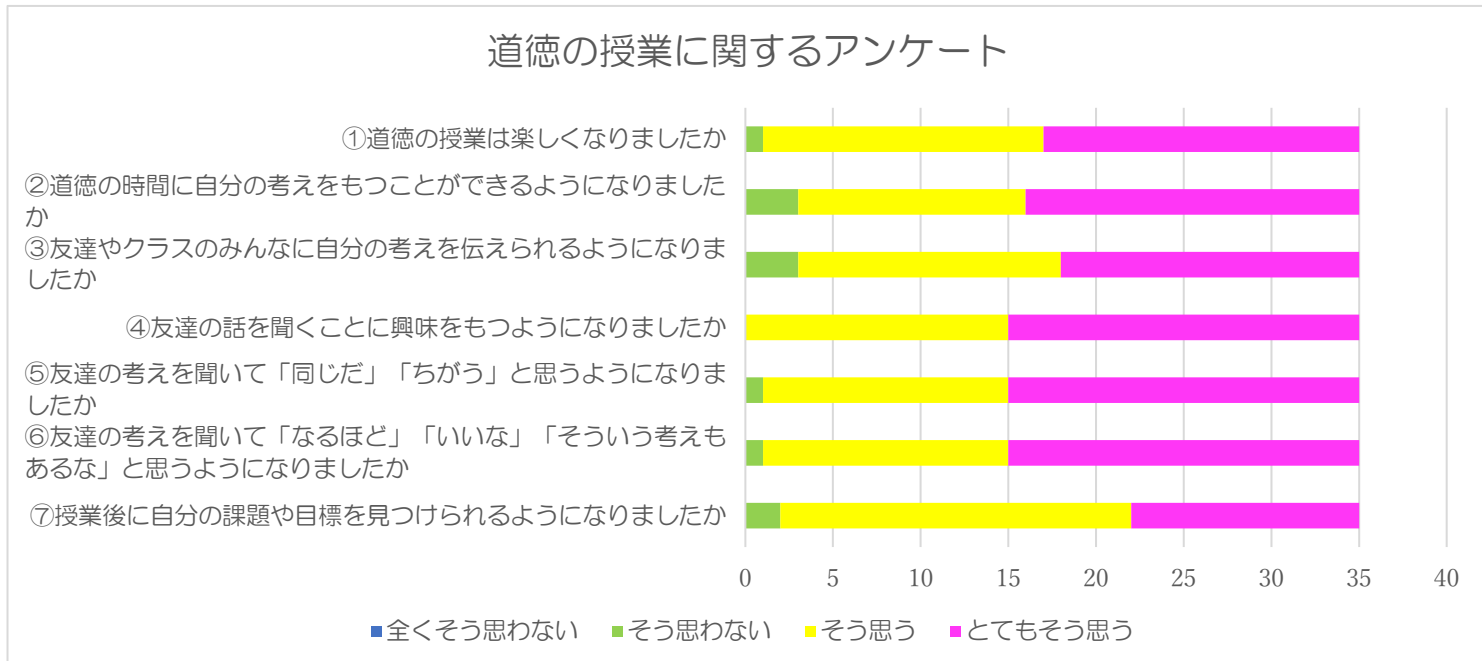
また、自由記述では「話す和理解できたり深められたから」「いつも班の形でたくさん話すから考えることが鍛えられた」「自分から発言するという習慣がついたから」「感情や考えを上手に友達に話すことができるようになったから」「友達と話し合うことが好きになって、みんなとの話し合いも好きになった」「今日のきりりでみんなの素敵ところを言い合えたり、朝の会で好きなことを知ったりすることができたから」などの声が見られた。

これらの記述から、児童自身が「考えをもつ → 言葉にする → 共有する」というプロセス、すなわち「問いに迷い、言葉でぶつかり、思いがつながる」過程を自覚的に経験していることがわかる。これらの結果から、仮説3が示すように、「安心して自分の考えを語り、対話を深める」ことが日常的な実践を通して確かに実現されていたと言える。

Ⅳ 成果と課題

1 児童の変容

◆アンケート結果



熱く語りたくなる問いを通して、児童は自分の立場に迷いながらも価値の対立を自分ごととして捉え、友達との対話を通して「なるほど」「そういう考えもある」と考えを広げていく姿が見られた。ICTの活用や日常的な話し合いの土台づくりにより、安心して発言できる環境が整い、授業を「楽しい」と感じながら、語り合って深く他者と関わろうとする意欲が高まっている。

◆事例

授業を通して、児童一人一人にも具体的な成長が見られた。

- ・Mさんは、当初「授業中に指名されると泣いてしまい、何も言えない」状態だったが、最終的には自分から意見を言ったり、友達の意見に「ちょっとちがうと思う」と返したりするまでに成長した。これは、安心して意見を言える雰囲気づくりと、熱く語りたくなる問いによる思考の明確化が大きく寄与していると考えられる。

Sさんは、これまで話し合いの場面ではうなずくだけで発言はなかったが、授業を重ねるうちに「それって、こういうことかな？」と相手の意見を言い換えて確認する姿が見られるようになった。他者の意見を丁寧に受け止める態度が育ちつつあることがうかがえる。

- ・Aさんは、「どちらでもいい」と曖昧な返答が多かったが、主発問に対して「私は～だと思う。なぜなら～だから」と、自分の立場をはっきりさせるようになった。自分の考えを持ち、根拠を添えて伝える力が高まっている。

Cさんは、以前は自分の意見を押し通す場面が目立っていたが、「〇〇さんの考えもわかる気がする」と他者の意見に共感する言葉が増えた。対話の中で柔軟に考えを広げる姿勢が育まれている。

Kさんは、いつも周囲に合わせる傾向があったが、道徳科の授業を通じて「みんなと違って、言っていると思った」と発言。少数意見でも自信をもって伝える姿に、自己肯定感の高まりが見て取れる

- ・Yさんは、他の授業ではなかなか授業に参加せず、落書きをしたりノートを書かなかったりする姿が見られたが、話し合いの場面では友達とのやりとりを積極的に行い、自分の意見を「そうじゃん」「それはちがうよ」と明確に伝える姿があった。対話的な学びの中で内面の意欲が引き出されたと考えられる。

2 成果と課題 (○成果・●課題)

仮説1

主発問を“熱く語りたくなる問い”にすることで、児童は価値を自分ごととして捉え、自分の思いを熱く語り合い、自己の大切にしたい価値について考えを深めることができるだろう。

- 熱く語りたくなる問いにより、児童が自分の立場を明確にしようと、考える意識が高まり、語る力の向上にもつながった。
- 「友達の意見を聞いて“なるほど”と思った」「反論されて考えが変わった」という回答から、対話を通じた思考の変容が見られた。
- 多くの児童が「自分の考えが変わった・深まった」と回答し、価値の揺れや自己の内面との対話が起きていた。
- Forms やオクリンクを活用した意見の整理・可視化が、思考の深化や対話の材料となった。
- 子どもたちの考えを引き出し、価値のゆれを深めるためには、教師が問い方を工夫したり、問い返す力を高めたりすることがとても重要であると感じた

仮説2

「いろはの道」を意図して授業作りをすると、児童が熱く語り合うことができるだろう。

- 「い（入口）」「ろ（路）」「は（羽）」の視点で定義し教材を分類したことで、授業展開の型が明確になり、教材に応じた設計がしやすくなった。
- 価値へのアプローチが明確化した上、児童に合った展開ができることで、児童が主体的、意欲的に考え、熱く語り合う道徳科の授業となった。
- 授業づくりの効率化ができた。
- 教材を「い」「ろ」「は」の型に明確に当てはめるのが難しいと感じる場面もあり、分類に迷うことがあった。

仮説3

日々の教育活動を通して心を耕し「環境づくり」や「考える力・語り合う力・つながる力」といった対話の基礎を養うことで、児童は安心して自分の考えを語り、価値を深めることができるだろう。

- 「朝の会のスピーチ」「究極の2択」「感情語の掲示」「Qワード」などの継続的活動により、考える力、語り合う力、つながる力の土台が育まれた。
- 実際に「熱く語り合うことができた理由」として、児童がこうした活動を多数挙げており、心耕す教育活動と道徳科の授業が接続していた。

- 自分の考えを語りたいと思う児童が増え、道徳科の時間に「もっと話したい・聞きたい」と思える安心感ある雰囲気生まれた。
- 「考える力・語り合う力・つなげる力」を育むには、一定の時間と継続的な取り組みが必要であり、短期間では成果が見えにくいという難しさがあった。
- 「朝の会のスピーチ」「究極の２択」「感情語の共有」など多様な“心耕す活動”がある中で、すべてを日常的に継続するのは時間的・体力的にも負担が大きく、取捨選択や年間を見通した計画が必要だった。
- 道徳性を養うという活動の意図やねらいを教師が明確に把握しないと、表面的なスキルの習得になる恐れもあると感じた。

3 まとめ

本研究を通して、児童の中に「考える力」「語り合う力」「つなげる力」が着実に養われ、自己の大切にしたい価値について、揺れながら深く考え、自ら語ろうとする姿が多く見られるようになった。そこには、児童の心を揺さぶる問いがあり、安心して思いを表現できる環境があり、自らの変容に気づける授業の構成が効果的だったと感じる。

これからも、問いに迷い、言葉でぶつかり、思いがつながる中で、子どもたち一人ひとりが“自己の生き方”について熱く語りたくなるような、そんな道徳科の授業づくりを目指していきたい。